

(秋季特別大会)

〈研究論文1〉

中世インド神秘主義思想の神性表現における諸問題

——カビール・ナーナクにおける神秘思想を中心として——

保坂俊司

はじめに

本稿は、中世インドにおいて中・西北インドを中心に活躍した思想家であるカビール（三九八—四四八？又は一四四〇—一五八？）と、シク教の創始者として日本でも知られるようになったナーナク（一四六九—一五四八）の「神名」（特にその代表として、カビールのラーム〔Ram〕とナーナクのナム〔Nam〕）についての考察をおして、両者の思想に見られる最も大きな共通性であるヒンドゥー・イスラーム（以下H・Iと略記）融合思想の根拠が、神秘主義思想に求められるのではないかと示そうとするものである。

カビールとナーナク（以下K・Nと略記）は、思想全般に渡って

類似性が多いとされ、また生存年代に重なる時期があるとの説があるために、両者の間には「師弟関係があった」あるいは「直接面識があった」というのが一般的な理解である。しかし、シク教徒の研究者を始め、最近の研究者の多くはこの説に否定的である⁽¹⁾。つまり、K・Nの間には直接交渉は無く、この二人は全く別個にその思想を發展させたということである。しかし、勿論、彼等が主張するようにK・N間における直接的な思想交流が認められないとしても、K・Nの思想的類似性が否定されるわけではない。寧ろK・Nの直接的な思想交流が否定されることによって、両者の思想的類似性の問題は以前にも増して重要になってくると思われる。

特にK・Nの両者は、H・I両教徒からともに聖者として崇め

られており、K・Nが主張するH・I両教の融合思想の中には、

H・I両教徒が互いに認め得る普遍性が存在するとみることができ
 けるのではないだろうか。この点に関してK・Nの思想的共通性
 の起源は、彼等が活躍した時代の中・西北インドに見られたH・
 I両教のシンクレティズムとして説明されることもある。つまり、
 一二世紀以来、イスラーム教のインド定着が本格化し、各地で
 H・I両教の融合を説く思想家が出現したというのである。彼等
 は一般に民衆思想家とよばれるが、既成宗教の枠に拘らない民衆
 間に根を張った宗教者たちであった。³⁾K・Nも彼等のうちの一人
 として位置づけることができるわけである。ところがこれらK・
 Nを含む民衆思想家については、彼等の多くが名もない一般人か、
 あるいは文字を書くことのできない階級のものであった等の理由
 で、研究は非常に遅れている状況である。幸いなことに、K・N
 の両者の作品は今日までシク教の聖典『グラント・サーヒブ』
 (以下『G』と略記)によって伝承されており、彼等の思想を十分研
 究することができる稀な存在である。

しかし、本稿ではK・Nをこの集団の一員として捉えることに
 K・N間の共通点をみいだすのではなく、あくまでもK・Nの思
 想を直接考察し、彼等の思想が内包している思想の深みの中にそ
 の共通点のあることを示すことに重点を置くことにしたい。その
 意味で今回は、K・Nの神名を中心に検討し、その思想の根底に
 神秘主義思想のあることを示そうとするのである。

神名の考察

K・NのH・I融合思想を検討するにあたり、すでに述べたと
 おり本稿では彼等の神性表現の象徴的存在としての神名について
 考察する。つまり神名とは「神がこの世に何らかの意味で原因と
 して関わる限りにおいて、神に与えられるもの」と言われるよう
 に、神名には、人間の神にたいする期待・願望、或いは理想や畏
 敬の念等の思いが象徴的に表されており、その宗教あるいは思想
 を知る上で最も特徴が現れていると考えられるからである。以下
 において、具体的にK・Nの神名について検討しよう。

	神名	語源	意味
カビール	Kabir	Kabira	A 大なる神
	Sāhibu	Sāhib	P 主、神
	Ṭhākūr Govind	Ṭhakkūr Govinda	S S 神
ナーナク	Allā	A'llā	A 神、上
	Haqu	Ḥaqq	A 正義、神
	Sāhibu	Sāḥab	P 主、神
	Dēva	Dēva	S 神

S: サンスクリット語
 A: アラビア語
 P: ペルシア語

いる。特にカビール
 は八〇以上の神名
 を用いているとい
 う研究もある。この傾
 向はナーナクにつ
 いても同様である。ナ
 ーナクについては、
 その代表作である
 「ジャブ・ジ」(Jap. Ji)
 という三九偈の小作
 品の中に於いて一〇

程の神名を用いている。

代表的神名とその語源を表によって示すならば前頁のようになる。表によって明白であるが、K・NはH・I両教の神名を幅広く用いている。この点のみをみると、K・Nの思想は「H・I両教の折衷」であるかのように思える。特にナーナクの思想は単なる「H・I両教の折衷思想である」と説明されることが多く、そのため思想的に価値の低いものとされてきた歴史がある。

しかし、この評価はK・Nの思想を詳しく検討すれば、彼等の思想を正しく考察した上での結論でないことは明白であろう。確かに、K・NはH・I両教のシンクレティズム（宗教的混交）の時代に活躍した思想家であった。その意味でK・Nの思想には、H・Iのシンクレティズムの思想があることは事実である。しかし、以下において述べるように、K・NはH・I両教を単に折衷した低次元のシンクレティズムを説いたのではないのである。K・NのH・I融合思想の裏には、彼等の神秘体験に基づく共通の思想があるのである。この点を明確にするために、前述のカビールのラームとナーナクのナーンムについて検討する。

ラームとナーンム

まず、カビールにおけるラームについて検討し、続いてナーナクのナーンムを検討し、最後に両者の共通点を示そう。

カビールが採用したラームは、ヴィシヌマ神の六番めの化身で

あるラーマチャンドラ (Ramachandra) あるいは、ダジャラットの神の第七の子がラーマと呼ばれることから、インドの民衆の間でも親しまれている神名の一つである。このラームをカビールが自らの神性表現に最適な言葉として選んだことに関して、一般には彼の師とされるラーマナンダ (Ramanaṇḍa: 一四世紀—一五世紀?) との関係が指摘される。しかし、カビール研究者の中には、カビールとラーマナンダとの直接交流を否定する者も多く、カビール（ナーナクも同様）に対する一般通念的理解は改めて検討を必要とするようである。

いずれにしてもこの点に関して確実なことは、カビールがラームを伝統的な解釈をこえて、新たな概念をもたせていることである。例えば、「彼は全ての幸いの主である。ラームの御名を唱えることは不死の水を飲むことだ。」(Gurbani) あるいは、「わたしは神の神であり、ラームは私の名である。」(Gurbani) などに、カビールの神観念の一端を知ることができよう。しかし、カビールのラームを最も端的に表している部分は以下の引用ではなからうか。

カビール、ラーム（神）と唱えることには不思議な力がある。その中には神の救いがある。

（カビールが使う）同じラームという言葉で、人々は（ダジャラットの子のラーマとして使い、（カビールは）すばらしい神の為に使う。

カビール、私は遍在するあなたのみをラームと呼ぶ。我々はこの言葉の差を知らなければならない。

唯一の神ラームは、全ての中におわし、一なる神から流出したものの（一般的なラーマ）は、唯一なるラームの一部（中身）である。

唯一なるラームは何処にでもおわす。しかし、唯一のラームは一つである。 (GS, p. 137a)

引用文で明白なように、カビールはラーマという従来からあった神名に明らかに、彼の神のイメージを与えている。つまり、ラームは唯一 (eka) であり、かつまた遍在 (Tranai) 複数形を用いて神の遍在性を表している。しており、さらにすべてのもの「ここではラームと表記されるが、カビールの神は創造神 (Karata) であることから、全ての被造物と解釈することが妥当であろう」は、唯一の神の内から生じた (sana) ものであると明言する点である。つまり、カビールの神は、ヒンドゥー教的な多神教の神ではなく、明確な一神でしかも創造主なのである。この神概念にカビールがイスラーム教から強い影響を受けているとされる理由の一つがある。このようにカビールは神名ラームに、新しい神のイメージを込めていたのである。

同様の試みは、ナーナクにおいてもなされている。但し、ナーナクはカビールが頻繁に使用したラームは殆ど使用せずナームをそれに替わる言葉として使用している。

ナーナクは、カビールのラームに近い概念でナームを用いていると思われる。つまり、神名の一つあるいはそれを象徴する言葉の一つとしてナームを使用する以上に、多くの概念をこの言葉に託している。以下において、その幾つかを検討しナーナクの神概念との関係を明らかにしよう。

ナーナクにおけるナームの語源はサンスクリット語における名称を表す *naman* である。この言葉は、ナーナクにおいては大別して二通りに使用される。

第一の用例は、合成語として用いられる場合である。例えば *sat-nam* (神は真理を御名とする。あるいは真理は神の御名なり) を始めとして *ek-nam*、あるいはナーナクにおいてはごく稀であるが、カビールにおいては頻繁に登場する *ran-namu*, *hari-namu* などの用法である。この用法には、ナームの前に K・N の神性が明確に表現されており注目されるものがある。特にこの用法の背後には、伝統的な名号崇拜が在ると思われる。⁽⁸⁾ カビールもナーナムもこの用法の場合には特に *sat* と *hari* に限られる傾向がある。特に *sat* はナーナクの神概念のキーワードである。⁽⁹⁾

次に、ナームが単独で使用される例を検討する。この用法は特にナーナクに多く見られる用法である。カビールにも見られないことはないが、頻度からいってナーナクが圧倒的に多く、ナーナクの神性表現の特徴といつてよいであろう。

勿論、この用法の中にも合成語の神名部分の省略形とみなすべ

き用例もある。例えば

ナームを繰り返し、ナームを瞑想し、ナームをとおして心の平安を得る
(GS, p. 136)

神の名(ナーム)を読み、神の名(ナーム)を真に理解せよ、神の教えは深いものである。

グルの教えによりナームの貴さを学ぶ。
(GS, p. 140)

しかし、ナームの単独用法の中には、単なる合成語の省略形ではなく、ナームを神名の総称あるいは、神そのものの象徴として用いるところに注目したい。

ナームを信じることで、幸福は得られる。

ナームをとおして、心の解放(悟り)は得られる。

ナームを信じることで、名誉が得られる。

(ナームによって)心は神となる。
(GS, p. 1241)

また、ナームは単に神名のみならず、彼の持つ不可思議な力を表す言葉、一種の呪文とも取れる用法もある。それは特にナーナクが、自らの神秘体験を表す場合に多用される。

ナーナク、ナームの瞑想によって、真理の神に御会いし、

そして、私(ナーナク)は、神である御方のナームを得た。

(GS, p. 1241)

(中略)

ナームを信ずることで、成長を理解し、ナームをとおして智慧は飾られる。

ナームを信じ、(神の)祝福を願うこと、ナームをとおして安らぎの眠をうる。

以上のように、ナーナクにとってナームは数多い神名の一つではなく、神性表現のキーワードであることがわかる。次にナーナクの言う神の属性について検討しよう。

神は唯一なり。

神は真理を名とし、創造主であり、恐れを持たず、恨みも無く、不滅であり、他によって生ぜず、自己自身によって存在される。グルの恩寵により知られる。

神は始源において真理であり、太古においても真理であった。

今も真理であり、また将来も真理であろう。ナーナクよ。

(GS, p. 1)

以上のように、ナーナクの神は絶対的超越者であり、創造主である。同時に、ナーナクは、神がいたる所に内在するということを次のようにいう。

神はいずこにも遍在する。

ナーナク、我々は全てあなた自身であり、あなたは真理である。
(GS, p. 1)

このように、ナーナクにおける神はカビール同様、絶対的超越者であると同時に、いずこにも遍在する神でもある。これはカビールの神性表現と殆ど同じである。更に両者に共通なことは、ラ

ームもナームも神の存在そのものを直接表現しているものではなく、あくまで神の一屬性を神の存在として象徴的に使用していることである。

K・Nは、神を絶対的超越者であると同時に、遍在者であるとしながらも、その存在を知る、あるいは表現することは不可能であると以下のように説く。

(人間は) 考えても、たとえ何十万回考えても (神の) 考えを知ることはできない。

(人間は) 瞑想することで、たとえ深い悟りの境地に達したとしても、(神の) 静かな心にはおよばない。

(中略)

(人間の) 誰に神の力を歌い挙げられようか、誰がその力を持つといえようか。

誰が神の恩寵と御印を知り歌い挙げられようか。

誰が神の徳と偉大なる御計らいを知り歌い挙げられようか。

誰が人間を形あるものとされ、また塵のようになさる神を歌い挙げられようか。

(中略)

神について話し、語る人間の言葉はない、

たとえ、神について幾十万幾千万の言葉を費やすとも。

(GS, p. 1)

このように、ナーナクは(基本的にカビールも同じ)人間には

決して神の御心を知ることとはできないとするものである。その根拠として「此の世は、神の意志(命令)によってあり、全てのものは彼の意志であり、彼の意志意外のものはない」(GS, p. 1)とするからである。

K・Nはこの世界観を前提として、自らを神の下僕 (hari ka daan: カビールは自らをこういう。GS, p. 1370) あるいは、人々の導き手 (guru: ナーナクの場合はこうよぶ) とよぶのである。

彼等にとつて、神を知る道は、神の言葉 (guru mukhi, sabuda, etc.) によってのみ可能なのであった。その根拠にK・Nの神との合一体験があつたのである。

この体験をカビールは次のように言う。

カビールは、真理の神に会い、唯一の神は私に神の言葉を御授けになつた。

(GS, p. 1372)

またナーナクは、

ナーナクは、ナームを心に念じて、神に御会した。そして、神が祝福するナームを授けられた。

(GS, p. 1241)

以上の例からも明白なように、K・Nは共に、神との合一体験から神の神性表現の限界である言葉の有限性を超越したと言えよう。

筆者は、この合一体験をカビールはラームに、ナーナクはナームによって表現しようとしたのではないかと推論するのである。

事実、彼等の伝記によればカビールもナーナクも共に、強い神秘

体験をしているのである。彼等はこの体験を基に、唯一なる真理の神の教え (gurusabd, gurumuki) によって、H・I両教を共に神の真理を説く教えとして融合しようとしたとされるのである。それはナーナクの「この世にヒンドゥー教もイスラーム教もない。あるのは只、唯一の神のみ」という言葉が象徴的に表している。

以上のように、K・Nの思想の立脚点はまさに、この合一体験によって得た神秘思想にあったのである。そして、その神秘思想のもつ普遍性によってH・I両教徒から、彼等のもつ主観的な宗教規定を超えてうけ入れられたのであろう。なぜなら、この神秘思想こそは、ヒンドゥーにもイスラーム教徒にも共通した思想潮流であったからであらう。

結 語

K・Nは共にイスラーム神秘主義(スーフイズム)の影響を強く受け、その思想を形成していったとされる⁽¹⁾。周知のように、スーフイズムは中世の西南アジア一帯に伝播した大きな思想潮流であった。特にスーフイーはイスラーム教のインド定着の原動力となった集団であるが、彼等は独特の神秘主義思想を展開し、積極的にヒンドゥー教との接点を造っていったという。K・NのH・I融合思想もその根底に神秘主義思想を持ち、それによって宗教的障壁を超越しようとした点に、強くスーフイーの影響を感じるのである。このようにK・Nの思想基盤が、H・I両思想に求め

られるということは、インド思想即ちヒンドゥー思想であったイスラーム進攻以前のインド思想と大きく異なる点である。K・N思想の特徴はまさにこの点に存在するのである。

本稿では、K・Nの思想をラームとナームに限定し、その神性表現に焦点をあててみた。その際、K・N思想にH・I両思想がいかなる影響を与えているかについては言及し得なかったが、今後の研究ではこの点に注目していきたいと考える⁽¹²⁾。

(1) カビールとナーナクの関係については、S. Tripcan, *Guru Nanak*, Delhi, 1969. W. Meleod, *Guru Nanak*, Delhi, 1968, pp. 85-86 などカビール教の資料を検討し否定している。また W. Dwyer, *Bhakti in Kabir*, patna, 1981 ではカビールの専門家の立場から俗説を否定している。

(2) M. Haq, *A History of Sufism in Bengal*, Dacca, 1975; S. Rizvi, *A History of Sufism in India*, Vol. 1, Delhi, 1975 註 15。

(3) W. Meleod, *op. cit.*, pp. 151-161.; Banerjee, *Guru Nanak And His Times*, Punjab univ. Press, 1971 等参照。

(4) 熊田陽一郎「美と光—西洋思想における光の考察—」国文社、一九八六年、五五頁。または同「偽ディオニシオス・アレオパキデーヌ」『中央大学哲学科紀要』二四号、一九七一年、等を参照。

(5) W. Dwyer, *op. cit.*, p. 7.

(6) Cole, Santhi, *The Sikhs*, New Delhi, pp. 38-42.

(7) Tra candi, *Influence of Islam on Indian Culture*, Lahore, 1979; S. Rizvi, *op. cit.*, pp. 374-384.

- (8) 仏教あるいは他の宗教との共通点が注目される。熊田論文参照。
- (9) 拙論「シク教の神観念」『比較思想研究』十三号、一九八六年。
- (10) ナーナクの伝記ジャナムサキ(Janam-Saki)には、詳しく彼の一生が記されている。
- (11) スーフィーの文献には単にヒンドゥー教徒の改宗者のみならず、仏教からのイスラーム教への改宗者が多かったと記されている。この点に関しては別の機会に紹介する。
- (12) 拙論「中世インド思想におけるイスラーム思想の影響―ナーナク思想にみるイスラーム思想」『東方』五号、一九八九年を参照のこと。
- (紙面の都合で、注は最低限必要なものを挙げるにとどめた。)
- (はさか・しゅんじ、インド中世思想、東方学院研究員)